

第3回揖保川流域懇談会 議事概要

開催日時：令和3年12月20日(月)15:00～17:00

場所：姫路キャッスルグランヴィリオホテル 3F 錦の間

～ 議事経過 ～

(1) 揖保川流域懇談会規約および情報公開方針について

事務局より揖保川流域懇談会規約および情報公開方針について確認。

(2) 揖保川水系河川整備計画の進捗状況について

事務局より揖保川水系河川整備計画の進捗状況について説明。主な意見および審議内容は以下のとおり。(○：委員発言，→：事務局発言)

- 全般的に適切に進捗している印象を受けた。引原ダムの再生事業が整備計画に及ぼす影響や再生事業について、参考に教えて頂きたい。
→ ダムを少し嵩上げ、ゲート改良により放流機能を拡充すると聞いている。受け渡し流量が変わることはないため整備計画に影響することはない。放流のタイミング等を少しずらし治水機能を上げるイメージである。
- 本日現地で見たような掘削箇所を元通りに左右交互に砂州ができるように蛇行しながら流れる滞筋を戻すことが揖保川の自然を保全していくうえで重要である。浅く川幅いっぱい流す形状にした場合と、川幅を狭く蛇行するように戻す場合では、後に砂州につく植生の遷移に違いが出てくる。浅く広く流してしまうと、土砂を捕捉するような植生が発達し元通りにならない可能性があるため配慮して頂きたい。
→ 元の滞筋を尊重した形で出来るように工夫していきたい。
- 樹木は順次伐採しているということであるが、樹木伐採の相談を受ける際に今後の伐採の場所が決まっていなと言われることがある。生物の生息、生育、繁殖の場に配慮した輪伐による計画的伐採に繋がるという意味で是非計画的にやって頂きたい。
→ 樹木の高さが高い所、密集している所等、総合的な判断で伐採している。河川整備計画に記載されている輪伐の考え方を尊重したい。
- 流域治水プロジェクトに関して、遊水地効果のある氾濫域の関係機関との調整について深く興味を感じた。全く氾濫しない川にすることは現実

的には不可能だと思う。そういう点で関係機関と調整することは非常に有意義である。このような調整会議を作ったとして、意見交換等も含め、どのように運用していくのか。

- 流域治水プロジェクトは、揖保川も含めた全国の一級水系で昨年度末に公表している。兵庫県では、以前から総合治水条例を既に定めており、自治体における貯める対策を支援する形で動いている。もう一つは被害があった際に逃げることも大事である。簡易型の水位計やカメラを整備しており、その映像や情報は誰でもスマートフォン等で見ることができ、自分の命を自分で守るために避難をしてもらうことを自治体と協力していく。
- 運用においては具体的には難しい点もあると思うが、万一の時には姫路河川国道事務所が主体となり、すぐに意思決定ができる手段を持つておくことが大事だと思う。

- 治水への対応を揖保川だけに負担をかけるのは大変であり、地域で高めることは重要と思う。姫路競馬場の地下を調節池にしているように、公共施設で率先して取り組んでいくような形で地域連携をお願いしたい。また、環境に関する事業のうち、“特徴的な河川環境の保全・再生”の進捗が無いが、今後、景勝地や河川景観、川まちづくり、史跡等の保全に関する計画はあるのか。
- この3年間では該当する事業がなかったが、例えば十二波の付近では掘削工事が予定されているので、保全を図る掘削方法等において配慮したい。

- 他河川に比べ流域全体の土砂の移動の観点の維持管理計画の説明があまりなかった。掘削した後、貯まっていくこともあると思うが、今後について教えて頂きたい。
- 掘削土は築堤事業に時期が合えば有効利用したり、他の現場や事業に活用するようなことは今後あると思う。川の中は定期的に横断測量を行い、河床変動計算等のシミュレーションにより検討を行っている。総合的な土砂の移動をどう考えるかについてはダムも含めて揖保川では未だ進んでいない。

- 横断、縦断測量を実施する中で、土砂を止めている堰や今後改良する堰はあるのか。
- 定期的に測量で把握はしている。固定堰で土砂を捕捉し、大きな洪水により水位がせき上げするため、そのような堰では、可動堰化していきたい。

- 民間の堰が多く整備が進まないということであるが、例えば気温上昇に

伴い水温が上がると思われ、アユ等の魚の逃げ場所を考えると、できるだけ上流側に逃がすとか水温が上がらない場所を作ることが必要になると思う。例えば、気候変動対策にもなるという観点や SDGs というような新しい角度の提案を盛り込みつつ、他管理者へ働きかけをすることも可能かと思う。

- 揖保川には堰が沢山あり、環境面では上下流の連続性ということで堰の改築が一つのテーマである。治水面では流下能力を上げるため堰の改築が必要なものもあり、その場合は魚道の改良等を一緒に進めている。他管理者の堰については、整備を求めているが、費用負担など問題があり進んでいない。単に魚道の整備を求めるだけでなく、上下流の連続性について、どこに課題があるのか、今後委員の先生のご意見を聞いていきたい。
- 指標化されていない維持管理は、見える化ができれば良いと思う。堤防等について事前に情報が把握できていると良いと思うが何か考えはあるか。
- → 維持管理における見える化は一つのテーマだと思うが難しい。参考までに河川管理の取組として、毎年事務所ホームページ上で、河川管理レポートを公表している。
- “丸石河原の再生”は環境面では珍しく定量的目標が設定され、ハード対策として着々と整備が進められている。一方で整備後に外来種が入っている事態がある。外来種のシナダレスズメガヤが土砂を捕捉し、河原環境を砂場に変えている状況が見え、気になっている。豊堤の向こうに見える風景、文化等を守ることを地域住民に理解して頂き、共に連携し、外来植物を除去する取組も必要と思う。
- 地域住民に（川の）催しに参加してもらうために、情報を伝達するには地域の自治体との強固なネットワークが重要である。
- 地域連携は持続する取り組みが大事である。環境面で興味のある方は沢山いると思うので、PRして連携していきたい。
- 平成30年度～令和2年度に耐震対策が実施されていないのは、工事と併せて実施するということか。
- 大きな堰等主要な構造物については進んでいるが、樋門等については予算取りが難しく改築の際に併せて実施するというのが実情である。
- 樋門耐震の基準は、南海トラフが基準なのか。
- レベル1として中規模の地震動について耐震性を確保するものであり、レベル2として阪神淡路大震災級の地震動など1000～2000ガルに対して

樋門の機能を保持するものとなっている。

- 平成 8 年の河川法改正に伴い、多自然型河川工法に取り組む動きがあったと思う。揖保川でも可能な限り、多自然型の整備を継承して欲しい。
- 多自然川づくりの考え方を念頭におきながら、例えば築堤護岸設計などでは自然素材を使用するなど河川の特徴に併せた整備を目指している。

- 揖保川の最下流には沢山の干潟が残っていたと思うが、県の水産試験場に話を伝えることで、魚の再生産の場になっているというような情報が入ってくるかもしれない。それにより下流から一つの生態系に関するものが見えてくるのではないか。
- 揖保川には河口に干潟が残っており、どのような生物が生息するかは国勢調査で把握している。加古川では河口部の浚渫土を播磨灘に投入している。この効果について県の水産課と連携して状況を見ているので、1つの事例として報告できればと思う。

以上